

ありま きいちろう
有馬 毅一郎さん

ブラジル しまね国際センター顧問

2021 年 10 月 31 日（日）中国新聞 SELECT 掲載

※中国新聞社の許諾を得ています



手料理や歌 交流深める

しまね国際センターは、国際協力機構（JICA）の草の根技術協力事業として、ブラジルで「サンパウロ州小学校教員の環境教育指導力向上事業」に 3 年、「サンパウロ州カサパーバ市における環境教育推進事業」に 4 年取り組んだ。今、事業の成果と現地の人たちとの親交の度合いとは、高い相関があるとの思いに至っている。

計 7 年間で 10 回にわたり現地に滞在した。事業の初期、研修の開始は 20 分や 30 分ずれ込み、途中の「ティータイム」後、再開はなかなかできなかった。ブラジルの人たちのおおらかさと、企画したスケジュールには「壁」があったのだ。

生活習慣や意識の違いは、相互理解が進むにつれて自然に歩み寄りの道が開けてくるものだ。私たちはチームで家庭に招かれることが多くなった。ブラジルでは安全対策のため民家も鉄格子で施錠されているが、中に入ると打って変わって開放的な雰囲気があった。

家族全員で客を迎える。他の仲間も家族連れで、手料理持参で加わる。通訳の人は必死なのだが、相互に楽しい会話が行き交って、底抜けに明るい爆笑の渦になる。やがて歌ったり、踊ったりも。私たちも打ち解けて一緒に楽しむ。このようなさまざまな親交の積み重ねが、事業を進展させ、深める上での協働意識を強めることにもつながった。

事業を終えた今も、今後の「環境教育」の推進を支えるために、現地との交流は大切にし続けるつもりでいる。今、島根県には、日系ブラジル人の労働者が約 3 千人いる。共生の取り組みが求められている。私たちは「ブラジルの風」というタイトルで、現地の様子の発信を始めた。多文化共生に向かう小さな追い風になりたいと思っている。



現地のプロジェクトメンバーの家族たちとの交流